

神経病時代

映画文学人生論

広津和郎 (1891-1968)

『神経病時代』 (1918) 「中央公論」

『波の上』 (1920) 「文章世界」

『怒れるトルストイ』 (1917) 「トルストイ研究」

『年月のあしおと』 (1963-67) 「講談社」

あんな女とは別れてしまふのだ。・・・
が、どうして別れる、子どもをどうする？

硯友社の作家広津柳浪の息子広津和郎は、作家には珍しく、父親が好きだという親孝行息子であり、息子と娘を愛する子煩悩の父親であった。松川事件では被告の無実を信じて、支援を続けた。

文学者の良心を代表する作家だが、そのイメージは出世作とされている『神経病時代』の題名にそぐわない。いったいどんな小説かと、おそまきながら興味をそそられ、読んでみた。

相性の悪い男女が結婚すると、その結婚は人生の墓場という主題の小説のようだ。

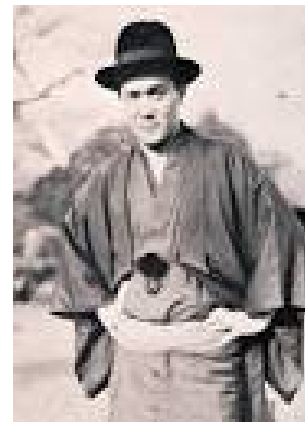
主人公の鈴木定吉は新聞記者で、半年ほど前によし子という若い女と同棲した。同棲の前に彼女と彼女との間には既に一人の男の子が生れていた。

よし子の妊娠を知った時から彼は彼女から如何に逃げようと思案したか・・・彼はまだ学校生活を終ったばかりの時であった。彼は恥ずかしい思いをして里子の口を捜して歩いた。話がまとまりそうになると、よし子は立腹した。

定吉はよし子と同棲することを好まなかった。一年以上もいろいろ口実を求めてそれを避けた。

「あんな女とは別れてしまふのだ。・・・が、どうして別れる。子どもをどうする？」。

定吉のモデルは広津和郎自身だ。自伝『年月のあしおと』によれば、正月頃から下宿の娘である年上の女との関係が始まった。「およそ愛情とい



神経病時代

映画文学人生論

うものとは程遠い一種の衝動的なもので、激しい後悔が直ぐ追っかけて来たような関係」だった。彼は女のいる東京から逃げ出して、三保松原へ行った。トルストイ『戦争と平和』の翻訳のためだが、その仕事が終わり、東京に帰っても女のいる下宿は避け、宇野浩二の家に転がり込んだ。しかし、女の妊娠を知らされ、逃げ切れなかった。その時、「これがほんとうの責任なのだ！」と彼は自分に言い聞かせた。世の中には女を捨てる男が多い。それに対して、責任感のある自己には一種の優秀感を感じることができると。

ところが、好きでもない女と一緒に暮らすと、不愉快な思いをさせられる。『クロイツェル・ソナタ』が彼の頭に浮かび、「さうだ、あの女はトルストイの云ふヒステリー患者なんだ。過度の病的な不摂制から来るヒステリー患者なんだ！」と思ったりもした。

やがて女が、男の子に続いて女の子を生み、彼はついに婚姻届を提出した。だが、忍従にも限界がある。離婚はしないが、別居することにした。息子と娘は女が引取り、生活費は広津の負担。

その後、広津は松沢はまと暮らし、事実上の妻としたが、結婚はできない。それでも息子と娘を訪れてきたので、父性愛を發揮できた。娘は父の没後、作家となり、女流文学賞を受賞した。

今朝の春玲瓏として富士高し 広津柳浪